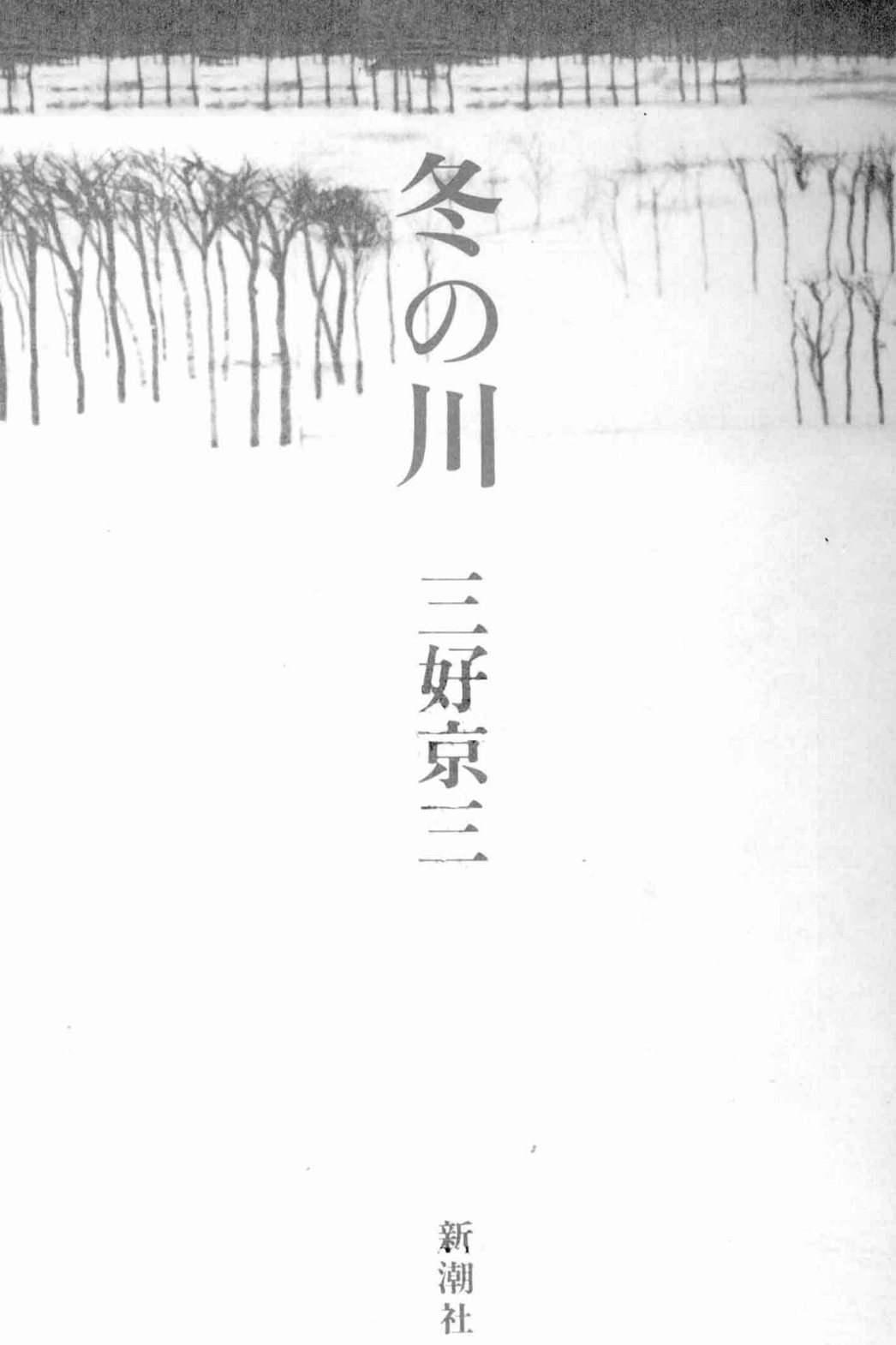


冬
の
川

三
好
京
三



冬の川

三好京三

新潮社

ふゆ 冬 の かわ 川

昭和56年4月10日印刷
昭和56年4月15日発行

著 者 み よ し き ょ う ぞ う
三 好 京 三

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 新 潮 社

東京都新宿区矢来町71 〒162

電話業務部(03)266-5111

編集部(03)266-5411

振替東京4-808番

印刷 株式会社金羊社

製本 植木製本株式会社

© Kyoze Miyoshi, 1981, Printed in Japan

乱丁、落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

定 価 980 円

冬
の
川

装
画
横
山
操

白の水干すいかんをまとい、わたしは薄暗い奥座敷にすわって、ふつうの民家では神棚と呼ぶ御魂様みたまさまを見上げています。いつも麻でくくっている髪は垂髻たきまげに垂らししました。女神主が神に見えるときまの髪で、立ち上がると先が畳にとどきます。四十歳のときからこの方、切ったことがあります。尼さんが剃髪するのは逆に、髪に鉋かみを入れないのが女神主であるわたしの、神へのつつしみと想っています。八年間、わたしの髪は自然のままです。祝詞を奏上するときにつける紋紗もんさの額当ぬかあてはつけていません。それは西洋の女王様の冠のように、額の部分が山型になっている、男性の烏帽子ぼしに代わるものでした。つけないのはあらたまった祭式ではなく、わたしの屈託した心のままに、御魂様に語りかけたくなってここにすわっただけからです。

広い萱葺かやぶきの屋敷の中、住んでいるのは今はわたし一人です。息子は東京の大学を出、一度帰ってまいりましたが、また出て行きました。おそらく、東北の片田舎の神職などはわずらわしくて、もう戻るつもりはないのでしょう。わたしは初詣でとか祭とかでなければ人の訪れることのないこの屋敷で、これからずっと一人です。苦しさのあまり一度だけ、のぼしていた髪を根元から断ち切ったこともあります。そのことで心が静まりはしませんでした。神への思いをかけたこの垂髻の髪を今もう一度切ったところで、息子が戻って来はしないのです。

神社の森で鳥の鳴いているのが聞こえます。御魂様に語りかけたあとは、森へ出かけて、そこに祀られている神々や、観音様を拝もうと思えます。御魂様を見上げていると、ここからは遠く離れた北国のたたずまいが浮かんできます。そこで生まれたわたしの身の上に、さまざまなことがふりかかって来たのは昭和のはじめ、わたしが小学校四年生のときでした。

一

父が二、三日出張で家をあけた日のことです。ねえやのさしかける水玉模様の日傘の下で、わたしは汗ばんでおりました。目の前では川原の白い砂利が夏の日射しをはじき返し、その向こうに十人近くの小学生たちが声をあげながら水遊びをしています。

鶴脛川つるはざきでした。北上高地の奥深い谷間に源流があり、数多い沢や川を合わせて延々百数キロ、ひたすら北流して青森県八戸の港から太平洋にそそぐ川です。わたしの住んでいる鶴脛村をはじめ、岩手県北部の町村はすべて山ひだにへばりつくか、山あいにつつましく肩を寄せあっている集落ばかりなので、鶴脛川は、谷間だけを経めぐり続けてやっと海に出ると言っているのです。川岸は屹立する絶壁が多く、わたしがねえやと一緒に腰をおろしている川原の目の前にも、カエデやミズナラやクスギの緑に蔽われた山肌が、ふり仰がなければ頂が望まれないほど高く急な勾配でそそり立っています。

「ミフチ姐あねさま。そろそろ戻りあませんか」

ねえやのキクが申しました。ねえやと言っても四十歳近くで、庄屋の若旦那えなさまと呼ばれるわた

しの父やその弟妹である叔父、叔母の子守あねっこととしてわたしの家に住みついてから、もう二十年以上にもなるのです。作男の貞七と一緒にになり、曲り屋の中の一室に所帯を持っておりますが子どもがありません。

「もう少し待って」

わたしは川でしづきをあげている同輩たちから目を離さずにこたえました。首を急に動かしてねえやの方を見たりすると、脳髓のあたりがゆらめき、頭が痛くなって吐き気がしてくるのです。病氣というのではありませんが何やら虚弱で、いつも疲労感が瘦せた体内にこもっている感じがしました。

わたしもこの夏一度だけ、父母やねえやの眼をぬすみ、同級のミネちゃんやタカちゃんの真似をして、川原に着物をかなぐり捨て、身を切るような清流に素裸の身をひたしたことがあります。毎日灼熱の日ざしに体をさらしている者たちと違い、戸外で浴衣を脱いだりすることのなかったわたしの肌は、心もとないほどに細く生っ白くて、恥ずかしい思いをいたしました。体は水に浸かった部分だけが桃色に染まり、たわむれに平手でたたかれたり、激しく水をかけられたりしたところにも血が寄り集まったので、それまで「庄屋のミイちゃん」と呼ばれていたわたしの綽名^{あだな}は、「庄屋のモモちゃん」に変わってしまいました。その上わたしはやがて悪寒のようなものに襲われ、桃色になった皮膚が変に熱を持ってあつぽったい感じになりました。友だちから唇が紫になっていると言われて川原に上がりましたが、頭を激しくふりたたてたときのように、脳の奥底が重苦しく痛くなっています。そのまま熱い砂利の上にうつぶせになり、長い間寝ていました。やはり、わたしのひ弱な体に、みんなのような水遊びは合わないのです。以来、ねえやはわたし

を警戒して、ちよつとでも外へ出ようとすると、日傘を持って追いかけて来るようになりました。
「キクさあん」

遠くからねえやを呼ぶ声がしました。わたしはゆっくりと声の方に首をまわしました。川原から左手は、稲が銀色の穂を見せ始めた田圃^{たんぼ}で、その向こうに村の中央を突っ切る県道が通っています。それに面して広い菜園があり、曲り屋になっている萱葺きのわたしの家が建っていました。背後に杉林を背負っています。杉林は山の中腹まで続き、その上は灰色のぼろぼろした岩肌が、天を突くように聳え立っています。岩の壁の麓には、鶴脛観音が祀られています。

「キクさあん」

呼んでいるのは、この春からわたしの家に奉公に來ているサトという小女^{こおんな}でした。サトは川原の小学生たちと同じような黒っぽい着物を着て、畦道をこちらへ走っています。小学校六年を出たばかりですから、小学四年のわたしと三つしか年が違いません。

「何か起きあんしたべえか」

キクがわたしに日傘をさしかけたまま中腰になりました。

「大変なことができたって。キクさんもミフチ姐さまもすぐに帰れって」

サトは息を切らしながら、川原に着かないうちから叫んでいます。

「何したの？ 大旦那さんの工合でも悪くなりあんしたか？」

わたしの祖父は、ずっと床にいていいるというのではありませんでしたが、二、三年前に、軽い中風をわずらっています。

「いいえ。元気だども、とにかくすぐ家サ戻れって」

サトは胸をおさえ、息をはずませながら言いました。

「ではミフチ姐さま」

キクがわたしの手を引いて走りかけました。

「残りあんす」

とわたしはその手をふりほどきました。祖父の勇右衛門や、家族の者たちの体に別条のことがないのであれば、急用ができたと言っても、わたしが手伝わなければならないという仕事は家にはないのです。

「でも……」

キクはわたしが川原に残るのが気がかりのようでしたが、やがてわたしの手に日傘を残してサトと一緒に畦道を駆けて行きました。

わたしはまた蹲り、友だちの戯れ合っている川を眺めました。男の子たちは泳ぎに倦きたかして、小さな鍬や箱めがねを持って、岩蔭の魚をねらい始めています。女の子の中心になっているのはミネちゃんでした。成績がよく快活で、眼のくりくりした美人です。村に一軒しかない造り酒屋の一人娘で、夏場になり、みんながいつもと同じ木綿縞の単衣のままのときに、銘仙の白っぽい単衣に衣更えして学校に通うのは、このミネちゃんとわたしだけでした。

タカちゃんが仲間から少し離れています。年中黒い顔をしている眼の光る子です。勉強は中ぐらいで運動会の徒競走では常に一等をとるほど速いのですが、何かしらみんなから疎まれている。それは、この村でもさらに山奥の一軒家に住んでいる貧しい炭焼きの子であるというだけではなくて、タカちゃんの父親が、村では禁忌となっているにわとりやうさぎの肉を食べると噂されて

いるからでした。わたしの家の裏山にある鶴脛観音を、村人は鶴脛神社とも呼んで、神とも仏とも信仰しているのですが、その信仰のさわりとなるというので、この頃にはわとりやうさぎは食べない慣習があったのです。タカちゃんの父親がそれを食べるのは、いかに貧しいとはいえ、観音様への信仰も、村古来の敬虔な慣習もないがしろにする不埒なことだと、村人たちは村八分というほどではありませんでしたが、タカちゃん一家にはよそよしくしているのです。勢い、タカちゃんは川原の水遊びでも孤独になります。わたしはクラスで級長をさせられていましたから、そのようなタカちゃんともできるだけ遊ぶように心がけていたのですが、造り酒屋のミネちゃんは、タカちゃんをあからさまに嫌う素振りをいつも見せました。

日が対岸の絶壁の蔭に隠れました。山の多いこの村は、よほどに早い時間でも日ざしがさえぎられてしまうのです。友だちは思い思いに川原にさがり、濡れた体のまま着物に袖を通し始めました。

タカちゃんがわたしに近づいて来ました。

「モモちゃん。おらの家の本家の畑サ、桑実を食いに行かないか？」

「桑実？」

わたしはふっとほかの友だちに目をやりました。桑実はお腹によくないというので、わたしは母から食べるのを差しとめられていたのです。ミネちゃんはタカちゃんのことばなんか聞えないというように、牡丹の花模様のついた浴衣を着て、黄色い帯をしめています。

「行きあんすか」

わたしは腰を上げました。ミネちゃんたちののはしゃぎまわるのをじっと見ていただけで、少し

肩のこる思いもしていたのです。タカちゃんと一緒に遊んであげたいという気持ちもありました。「おら行かない。桑実を食べない」

それまで聞えないふりをしていたミネちゃんが言いました。タカちゃんに意地悪するようにも、わたしを詰つっているようにもとれる言い方でした。

かまわずタカちゃんは歩き出し、わたしもあとに続いて土堤にあがりました。タカちゃんの履いている藁草履は端の方がすりへって切れており、水遊びできれいになった踵かかとがすぐに土でよごれてしまいます。

北流する鶴脛川に沿い、タカちゃんは土堤を走ります。日傘を畳んでわたしも走りました。たちまち息が切れ、腹の底から何かがほとばしり出そうになります。ゆっくり歩いては息をととのえ、走っては咳きこみしてタカちゃんのあとを追いました。

川幅は下流に行くに従って広くはなりましたが、兩岸がしだいにせり上がり、やがて溪流のおもむきとなりました。右手は田圃が切れて急斜面があり、その上が畑になっています。タカちゃんの本家の畑は、その畑地の中でもずっと奥の方にありました。土堤を急ぎながら、タカちゃんの家には田も畑もないから、本家の畑の桑実を食べるのを楽しみにしているのだと思いました。

タカちゃんは桑畑の前に腰をおろし、息を入れてわたしを待っていました。緑の葉をつけた背のあまり高くない何十本もの桑の木がそれぞれ枝をひろげています。追いつくと、もうてのひらに五つ六つ、濃い紅紫の実をのせています。細かい粒々が薄緑の柄にびっしり体を寄せ合った、長さ二センチほどの実でした。

「モモちゃん、食べてみて」

初めてなのでおそろおそろそれをつまみ、口の中に入れて柄から食いとりました。桑実はけだるいような甘さを口の中にひろげましたが、上品という味ではないのです。舌に粟粒のような種が幾つも残りました。

「うまがんすべ？」

タカちゃんのがぞきこむので、

「とてもおいしい」

とはこたえましたが、幾つも食べられそうではありませんでした。禁じられているものを口に入れていけるせいか、甘いインクでも飲みこんだような気がします。

「さ、一杯取りあんすか」

タカちゃんは立ち上がりましたが、すぐに、

「あれ？ モモちゃん、あそこに見えるのは何だ？」

と、遠い谷底になっている川を指さしました。のぞきこむと、タカちゃんの指さしている方角に、やや大きな岩があり、その上手に白い長いものが横たわっているのです。しばらくそれに眼を凝らしていたタカちゃんは、やがて、

「人だ！」

と叫んでとびのきました。わたしは思わずタカちゃんにとりすがりました。

「何て言ったの？ 人だって？」

「うん、人だよ。死んだ人」

タカちゃんはおびえた顔になり、いつもきらきら光らせている眼を大きくみひらきました。わ

たしも恐ろしくなりましたが、まさか鶴脛川に人が死んでいるとはとても思えません。しかも白いものは、川原で遊んでいた子どもたちよりはずっと大きく長く思われました。

「嘘であんすべ？ 人では無ござんすべ？」

「ほんとだ、モモちゃん。もう一回見あんすべ」

二人は手をつなぎ、こわごわ崖のふちに寄って下をのぞき見ました。川の中の岩に押しとどめられ、白いものは少し折れまがっていました。そして、一方の端から、黒い長いものがただよっているのです。

「あの黒いのは髪だ！」

タカちゃんが素速くささやきました。

「髪？」

それはおどろくほど長く、流れに沿って伸びていました。

「女の人だ！」

タカちゃんに強く手をにぎられ、わたしはだしぬけに川底の人の手に触れられでもしたような衝撃を受けました。

「おっかねえ」

タカちゃんは手を離すと、横つとびに崖の上の小道をもと来た方へ走り出しました。

「待って、タカちゃん。待って！」

あわててわたしも駆け出しましたが腰がすわらず足がもつれるようです。タカちゃんはみるみる遠ざかって行きます。取り残されたわたしの背後から、谷底の冷えきった空気が立ちのぼって

来て、今にもおそいかかるような気がしました。

二

その日は旧盆明けの十七日で観音様の御縁日でした。村人たちは、観音様にお参りする途次、わたしの家に寄って酒をふるまわれ、それから山にのぼってゆくならわしでした。終夜観音様のお堂におこもりをする人たちは、夕食が済んでからやって来ます。わたしの祖父勇右衛門が観音様の別当であつたからです。わたしのうちは、庄屋のほか、別当様と呼ばれることもありましたが、もともと先祖代々別当だつたのではなくて、何百年も続いた別当様の家系の者がいて、観音様の近くに住んでいたのが、五、六十年前に火災があつて家族の者すべてが焼死したのださうです。以来、庄屋であるわたしの家が観音様のお世話をするようになり、祖父はその三代目でした。父は母と結婚する以前から村の収入役をつとめておりましたが、別当は庄屋本来の仕事ではないし、自分は神にも仏にも関心がないからと、観音様は祖父にまかせ、別当職を継ぐ意志も全くないと、ことでした。

タカちゃんと別れ、死霊からいつまでも追いかけられているようなこわい気持で、家を目ざして畦道を駆けていると、わたしの家からはつぎつぎに村の男女が出て来ました。ところが、その人たちはわたしに行き会つても、妙によそよそしく頭をさげるだけで、いつものように愛想笑いを浮かべ、「庄屋の姐様、今日もお美しいなす」などとお世辞を言う者がいないのです。怪訝な思いで、太い根元から無数の枝をさしあげ、肉の厚い緑の針葉を光らせている庭の櫟の前に立ちま

すと、縁先では作男の貞七がいかに恐縮した物腰で客たちに詫びていたのでした。

「申しわけありませんが、今日は都合で縁日酒はおあげできありません。このまま観音様サお出あつて呉なんせ」

お祭り気分の出鼻をくじかれた村人は、それで不満げにわたしの家を出て行っているのです。どのようなことがあったにせよ、いつものように酒をふるまって喜んでいただいたいのにと思つていますと、奥の方からわたしの姿を認めたらしいキクが出て来て、さ、ミフチ姐さま、と肩を抱き、村人からわたしを押し隠しでもするように、玄関の大きな闕をまたいで土間に連れこみました。

煤で黒くなっている萱葺き屋根の途方もなく高い天井は、がっしりした太い曲り木の梁がわたされ、夏でも中に入るとひんやりします。しかし家の中には、ふだんの涼しさとは違う、変に重苦しい冷たさが流れていました。飴色に拭きぬかれた板の間の上がり口には、見なれないたくさんの靴や下駄が並んでいます。村人は大部分が藁草履でやって来ますから、このいかめしい履き物の主は、よそからの客に違いありません。わたしは一瞬川底の女の人の死体を忘れ、板の間をこっそり歩いて炉端に腰をおろしました。

三十を過ぎたばかりの母は、ほっそりした体に鼠色の縮を着て小豆色の麻の帯をしめ、菓子鉢をのせた盆を持って座敷の方へ行きました。白い瓜実顔の美しい人なのですが、いつもより蒼ざめ、眼のふちが赭らんでいます。何かを思いつめて泣いているようでした。

ただごとでないことが持ちあがっているようです。サトに呼ばれたとき、自分も帰って来ればよかったと、タカちゃんと遊び歩いていた自分が後めたくなりました。気づくと、五つ違いの

弟の頼彦が、板の間の奥で土間に足をぶらさげ、サトと並んですわっているのです。ふだんであれば、サトとかキクが客への茶菓を運ぶのに、サトがそのように手持無沙汰な恰好で弟と一緒にいるというのは、よほどに大事な客に違いありません。

土間の向こうは広い納屋うまやになっていて、そこで座敷が直角に折れ曲がり、貞七、キク夫婦の部屋や、かいば小屋、厩うまやが続いています。そちらの方から、さきほどわたしを家の中に連れこんだキクがやって来ました。二頭いる馬に、かいばでもやって来たのでしょうか。炉端のわたしに寄り添うようにすわり、座敷の方をうかがうようにしながらささやきました。

「村長さんの、執達吏だの、警察の人も来ておりあんです」

「何したの？」

警察と聞いて不安が嵩かさまりました。

「どうになったものなんだか……。でも、若旦那えなさまが何かおそろしいことをおやりあったようでごさんです」

「父さんが？」

反射的に白い死体を思い浮かべました。あの人とかかわりがあるから警察の人も来たのではないだろうか？

やがて座敷の方で人のざわめく音がしました。帰りの挨拶をしているようです。わたしは急いで板の間に出てすわりました。偉いお客様が見えたときは、そこでお見送りのお辞儀をするのが例で、いつか県知事がおいでになったときもそうしたのでした。

座敷からは、洋服を着た男の人たちがぞろぞろ出て来ました。一様にこわい顔をしています。